It Don't Mean A Thing
スイングしなけりゃ意味ないね

String of Pearls
ストリング・オブ・パールス

1. イッツ・サンド・マン It's Sand, Man《E. Lewis , J.Hendricks , D. Lambert》(2:45)
2. 42丁目 Forty Second Street《H. Warren , A . Dubin , M. Witmark》(3:14)
3. ガール・トーク Girl Talk《N.Hefti / Additional lyrics by J. O' Connor》(2:40)
4. プロフェッサー・バップ Professor Bop《B. Gonzalez 》(2:36)
5. スイングしなけりゃ意味ないね It Don't Mean A Thing《D. Ellinggton - I. Mills》(3:27)
6. ワン・ノート・サンバ One Note Samba《A. C. Jobim - N. Mendonca》(3:27)
7. ナイス・ワーク・イフ・ユー・キャン・ゲット・イット Nice Work If You Can Get It《G & I. Gershwin》(2:47)
8. ストレイトン・アップ&フライ・ライト Straighten Up & Fly Right《I. Mills - N. K. Cole》(2:51)
9. アイ・ヒア・ミュージック I Hear Music《E. Loesser - B. Lane》(4:41)
10. 真珠の首飾り A String Of Pearls《J. Gray , E. Delange / Additional lyrics by H. Ross》(2:42)
11. クレイジー・ピープル Crazy People《J. V. Monaco - E. Leslie》(2:44)
12. スマック・ダブ・イン・ザ・ミドル Smack Dab In Middle《C. Calhoun》(3:00)
13. ティーチ・ミー・トゥナイト Teach Me Tonight《G. Depaul - S. Cahn》(3:46)
14. サウス・アメリカン・ウェイ South American Way《A. Dubin - J. McHugh》(2:35)
15. サーモネット Sermonette《J. " Cannonball" Adderly - J. Hendricks》(2:50)
16. グロー・ウォーム Glow Worm《J. Mercer》(2:39)
17. センチメンタル・ジェントルマン・フロム・ジョージア Sentimental Gentleman From Georgia《M. Parish - F. Perkins》(2:49)

スーザン・ハローラン Susan Halloran
ジーン・オコーナー Jeanne O'Connor
ホリー・ロス Holli Ross

Ⓟ Ⓒ 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Susan Halloran , Jeanne O' Connor , Holli Ross .
Re-mastered by Venus 24bit HyperMagnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Photographs : Steven Begleiter.
Make up : William Ahrents.
Designed by Taz.

■歌う真珠の首飾り

最初にこのアルバムを手に取ったとき、一瞬String of Pearlsはアルバム・タイトルかと思ったが、String of Pearlsは3人娘からなるコーラスの名前であって、'80年代の中頃から歌い続けているという。一、二曲聴いただけで、ぼくはすっかりこの女性コーラスに惚れ込んでしまった。そして真っ先に思い出したのは、戦前から活躍していた女性コーラス、ボスウェル・シスターズやアンドルーズ・シスターズのことだった。じっさい、ストリング・オブ・パールスは、この2つのグループのレパートリーも歌っているが、それだけではなく、バップ・ナンバーやファンキーなモダン・ジャズ・ナンバーまで歌ってみせる新しさがあり、L.H&Rを思わせる現代的でもある点が大いに気に入った。

また男性コーラス、ミルス・ブラザースの当たり曲「グロー・ウォーム」を取り上げたり、自分たちのグループ名になっているグレン・ミラー楽団の当たり曲「真珠の首飾り」を歌ってみせるユーモアのセンスにも心憎いし、嬉しくなった。しかも、コーラスのレベルが高く、そのセンスのよさと、高度でしかもエンタテインメントにあふれた美しいハーモニーを聴いているだけで、なんだか心豊かでゴージャスな気分になってくるのだ。

ぼくは昔から、ジャズ・ヴォーカルなどとは呼ばれない、ポップ・ヴォーカル（ただし、もっぱらスタンダードを歌うシンガー、コーラスに限る）が好きでよく聴いてきたし、そのようなレコードを集めてきた。なぜだろうと考えてみると、それは戦後どっと流れ込んできたアメリカン・ポップスの洗礼を受けてきたからに違いないと思えるのだ。戦後、禁止されていたアメリカのジャズやポップスが堰を切ったように一気に流れ込んできた。ジャズの場合は、'40年代の中頃といえば、バップが出現した頃なのだが、バップもスイングも一緒に入ってきたので、耳も思考もいささか混乱したし、その上、ポピュラー・ソングも入ってきたので、聴くのがとても忙しかった。また、当時のスイング・バンドには歌手やコーラスがいて、とてもゴージャスだった。グレン・ミラー楽団には混声コーラスのモダネアーズが、トミー・ドーシー楽団にはパイド・パイパーズがいて、コーラス好きにもなってしまった。

女性コーラスに限ると、先出のボスウェル・シスターズ、アンドルーズ・シスターズのほかに、フォンテン・シスターズ、コーデッツ、キング・シスターズ、タイニング・シスターズ、マクガイアー・シスターズ、クラーク・シスターズなどがあり、レコードを見つけると、せっせと買ったものだ。女性コーラスの甘美さとほのかなお色気に惚れたのである。少し時代が下がると、ポインター・シスターズ、レノン・シスターズ、バリー・シスターズ、ザ・デイ・カストロス、ザ・スター・シスターズなども現れたが、ぼくは基本的にはスイング系の女性コーラスが好きだ。その点、本アルバムのストリング・オブ・パールスはぼくの好みにぴったりである。ところが、ライブということになると、スイング派のコーラスはほとんど生のステージを聴いていない。アンドルーズ・シスターズだけは、一度'74年にニューヨークのブロードウェイで、ミュージカル「オーバー・ヒア」に出演している彼女たちを観て聴いた。戦争にまつわるミュージカルなので、褐色の軍隊姿で歌った彼女たちは、とてもカッコよく、セクシーで魅力があった。ただ時差ボケで観たので、記憶が少し曖昧なのが残念。

混声コーラスでは、ランバート，ヘンドリックス&ロスをレコードでよく聴いたが、このコーラスの一員だったジョン・ヘンドリックスが、ストリング・オブ・パールスの本アルバムに推薦文を寄せている。たしかにこの女性コーラスが歌うジャズ・ナンバーには、L.H&Rに通ずるモダニティが感じられ、ジョンが気に入ったのもよくわかる。今日、混声コーラスといえばマンハッタン・トランスファーだが、'50～'60年代におけるL.H&Rの人気はすさまじかった。ほかにアメリカと日本でも聴いた粋で洒落たデュオにジャッキー&ロイがいたが、ロイが亡くなり、ジャッキー・ケインはとうとうソロ・シンガーになってしまった。

なんだか、コーラスのことを思い浮かべていると脇道にそれてしまったが、久しぶりに楽しい女性コーラスを聴いて嬉しくなってしまったからだ。先に触れたように'80年代半ばから歌っているそうだが、メンバーはスーザン・ハローランSusan Halloran、ジーン・オコーナーJeanne O'Connor、ホリー・ロスHolli Rossの3人である。名前からみて3人は血縁関係はなさそうだが、ジーン・オコーナーはオコーナーという名前からみてアイルランド系のようだ。女性コーラスの中には、メンバーが結婚して、一人が引退なんてこともありうるが、この3人の顔を写真で見ていると、なんだか男女の関係も含めて、十分に人生を楽しみながら歌っているといった表情をしているので、解散などしないで歌い続けてくれるものと安心してよさそうである。

かつてマクガイアー・シスターズが、メンバーの一人が抜けて活動を中止したことがあり、7、8年前に抜けたメンバーがまたメンバーに戻って活動を再開し、ラスベガスで歌っているというニュースを「ニューズ・ウイーク」で読んだことがある。その記事によると、その抜けたメンバーは有名なマフィアの親分の夫人だか愛人になっていたので歌手をやめていたが、そのマフィアの親分が亡くなったので、またグループに復帰したとのことだった。アメリカの芸能界の事情もなかなか複雑なようである。

ただ、このストリング・オブ・パールスのメンバーについては、個人的な分担はよくわからないが、みんな音楽的にはすぐれた才能があるようで、数曲を除いて、編曲はメンバーのホリー・ロスが担当しており、彼女とジーン・オコーナーは詩の一部を書き加えたりしている。なお、共演のミュージシャンは下記の人たちである。

ケン・ヒッチコック（テナー、アルト、ソプラノ・サックス、フルート、クラリネット）
ランディ・サンドキ（トランペット）
トニー・リガシス（ピアノ）
ビル・モリング（ベース）
ダリル・ペルグリーニ（ドラムス）

トランペットのサンドキはスイング系の名手として、今ニューヨークでもっとも忙しい一人だ。また、ケンのサックス、クラリネットでの活躍もめざましい。

■曲目について

「イッツ・サンド・マン」はエド・ルイス、ジョン・ヘンドリックス、デイヴ・ランバートの作で、L.H&Rが歌っていたが、それを新しくヴォーカリーズして歌ったものである。しかし、混声でなく、女性3人で歌っているので、ずっと可愛らしく、モダンな中にも可愛さを生かしているところを大いに買いたいと思う。シェイクしてみせたり、この一曲を聴いただけで、ぼくはステキさとうまさに完全にノックアウトされてしまった。

「42丁目」は古いハリー・ウォーレンの作曲で、アル・ダビンの作詞。'33年に作られた同名の映画の主題歌で、最近同名のミュージカルがリヴァイバル・ヒットしている。こういう古い曲を歌ってくれるのがうれしい。

「ガール・トーク」はトランペッターで、作・編曲者ニール・ヘフティの作曲だが、これにジーン・オコーナーが歌詞をつけ加えて、フレッシュなナンバーとして聴かせてくれる。女性3人のコーラスは混声コーラスに比べると、ずっと色っぽいことを改めてこの曲でも発見した。

「プロフェッサー・バップ」はバップ・シンガーで、ジャイヴ（ハーレム的おしゃべり）のアーチストとしても有名で、バップやジャイヴの本も書いているベイブス・ゴンザレスの作品で、作者は'50年代に歌っている。ぼくは'72年にハーレムに近いジャズ・クラブで、トロンボーンのベニー・グリーンと共演している彼を聴いたことがある。こんなBopに目をつけるあたり、大したものだが、L.H&Rとの共通点を感じたりもする。ジョン・ヘンドリックスは本アルバムに協力したようだ。

「スイングしなけりゃ意味ないね」はエリントンの名曲だが、最初ゆったりしたテンポで歌うあたり、意表を突いていて面白いし、次いでテンポを上げたりユーモアたっぷりなのがいい。ここではサンドキのトランペットがソロをとるが、3人娘の一人がトロンボーンを真似た声を聴かせるなど、なかなか芸達者だ。

アントニオ・カルロス・ジョビンの「ワン・ノート・サンバ」の洒落たサウンドをのどと声でリズムを打ち出したり、ここでも彼女たちのユーモアのセンスが楽しめる。

「ナイス・ワーク・イフ・ユー・キャン・ゲット・イット」のシンプルなコーラスは、アンドルーズ・シスターズ的だ。ヒッチコックのクラリネットが効果を上げている。

「ストレイトン・アップ&フライ・ライト」はアンドルーズ・シスターズも歌っていたし、ナット・キング・コールの自作自演でヒットした。ちょっとジャイヴ的なユーモラスな歌であり、このコーラスの売りもののひとつといっていい。

「アイ・ヒア・ミュージック」はバートン・レインが作曲、フランク・レッサーが作詞し、'41年の映画「ダンシン・オン・ア・ダイム」に用いられた。3人の女性によるコーラスだが、雰囲気としてはジャッキー&ロイ的なソフィスティケーションを感じるのは、ぼくだけだろうか。

「真珠の首飾り」はグループ名にしただけあって、最大の聴きもののひとつだ。もちろん、あのグレン・ミラー楽団のアレンジをうまく使って歌っているが、この女性コーラスの可愛さとお色気を堪能できる。やっぱりスイング調のコーラスっていいなあと思ってしまう。

「クレイジー・ピープル」のノスタルジックなコーラスにも感心するが、「スマック・ダブ・イン・ザ・ミドル」では一転してロックン・ロール調となる。その切り換えが愉快だ。

「ティーチ・ミー・トゥナイト」は多くの歌手が歌っており、ジョー・スタッフォードやブロッサム・ディアリーが歌ったものも好きだが、このコーラスを聴いて、またひとつこの歌の好きなヴァージョンが増えた。

「サウス・アメリカン・ウェイ」はジミー・マックヒュー作曲、アル・ドゥビン作詞によるもので、たしか映画「ダウン・アルゼンチン・ウェイ」の主題歌だった。アンドルーズ・シスターズが歌っており、彼女たち似の歌いっぷりをみせてくれる。

「サーモネット」はキャノンボール・アダレイ作曲によるゴスペル・ファンキー・ナンバーで、ジョン・ヘンドリックスが詞を書いているが、こういったモダン・ジャズにも取り組む冒険心は大したものだし、それをみごとにこなす実力の持ち主なのだ。

「グロー・ウォーム」がミルス・ブラザースの大ヒット曲であることは誰でも知っているが、あのあまりにも有名な男性コーラスのナンバーをあえて歌う挑戦心も、このチームの面白さだろう。ジョニー・マーサー作である。

ラストは「センチメンタル・ジェントルマン・フロム・ジョージア」で、コーラスとソロ・ヴォイスで、ユーモアに仕上げている。

全17曲、ずいぶん盛りだくさんだ。いろんな歌をいろんな歌い方で聴かせてもらい、女性3人のコーラスだって、多彩な表現ができるものだと感心したし、なにかさまざまなシーンが展開される映画かドラマを観たときのような充実感と満足感が得られた。彼女たちはなかなか演出力があり、しかもドラマの主役を立派に務めており、改めてコーラスの豊かな表現力と可能性に驚かされた。聴き終わって、おいしい料理をたっぷり食べたときのような幸せな気分になった。またぜひ二作目を聴いてみたいものだ。

（岩浪洋三）